

脂質生化学研究 Circular

1997

日本脂質生化学研究会
(JCBL)

第39回日本脂質生化学研究会・研究集会のお知らせ

- 期 日：1997年6月13日（金）・14日（土）
- 会 場：早稲田大学国際会議場
東京都新宿区西早稲田1-20-14
TEL. 03-3203-4141 EX. 5187 ※会期中のみ
- 発表形式：すべて口頭発表 A講演：発表15分+討論5分=20分
B講演：発表12分+討論3分=15分
スライドプロジェクター（1台）のみ使用します。OHPは使用できません。
- 実行委員長：井上圭三 東京大学薬学部衛生化学教室
〒113 東京都文京区本郷7-3-1
TEL. 03-3812-2111 内線4723（担当：新井洋由）FAX. 03-3818-3173
- シンポジウム1：「酸素ストレスとリン脂質代謝」
シンポジウム2：「リポ蛋白レセプターの新展開」
- 集会参加費：事前参加費：4,000円 ※同封の振替用紙をご利用下さい。
参加費と懇親会費は、できるだけ事前に払込み下さいますようお願い申し上げます。
事前参加申込締切日：1997年5月20日（火）までに同封の振替用紙にて払込み下さい。6月上旬頃に参加証を送付させていただきます。
当日参加費：5,000円
注）名誉会員、賛助会員の皆様には、別途ご案内申し上げます。
- 懇 親 会：日時：6月13日（金）18：00から
会場：リーガロイヤルホテル早稲田3Fロイヤルホール 研究集会会場より徒歩5分
事前参加費：5,000円 ※同封の振替用紙をご利用下さい。
備考：当日は先着順で受付をいたします。
会場の収容人数に限度がありますので、当日の参加申込みが出来ない場合がございます。
- 宿 泊 関 係：懇親会会場である「リーガロイヤルホテル早稲田」のご協力により、特別宿泊価格で予約出来ることになりました。
なお、部屋数に限りがございますので、お早めにお申込み下さい。
宿泊期間：6月12日（木）～14（土）
シングル（一泊朝食付・税サ込み）17,000円
（通常価格約30,000円のお部屋）
ツイン（一泊朝食付・税サ込み）25,000円
（通常価格約45,000円のお部屋）
※ツインの場合は、お一人12,500円となります。
お申込先：リーガロイヤルホテル早稲田 橋口真寿男（早稲田大学担当）
〒169 東京都新宿区戸塚町1-104-19
TEL. 03-5285-1124 FAX. 03-5285-8977
申込方法：お電話にてお申込み下さい。
備考：今回は、その他の宿泊施設ならびに交通機関の予約に関する事項を省かせていただきました。何卒ご容赦下さいますようお願い申し上げます。

第39回日本脂質生化学研究会 シンポジウムのお知らせ

今回の研究集会では、次のようなシンポジウム2件を予定しております。

○シンポジウム1 6月13日(金)

「酸素ストレスと脂質代謝」

オーガナイザー：西島正弘(予研)

1. 酸化ストレス応答とレドックスシグナル
淀井淳司(京大・ウイルス研)
2. 抗酸化ストレス酵素としてのPAFアセチルヒドロラーゼII
新井洋由(東大・薬)
3. リン脂質ヒドロペルオキシドグルタチオンペルオキシダーゼ(PHGPX)
中川靖一(北里大・薬)
4. グルタチオンペルオキシダーゼのNOによる阻害とperoxidesの蓄積
谷口直之(阪大・医)
5. アラキドン酸-酸素添加酵素の反応機構
山本尚三(徳島大・医)

○シンポジウム2 6月14日(土)

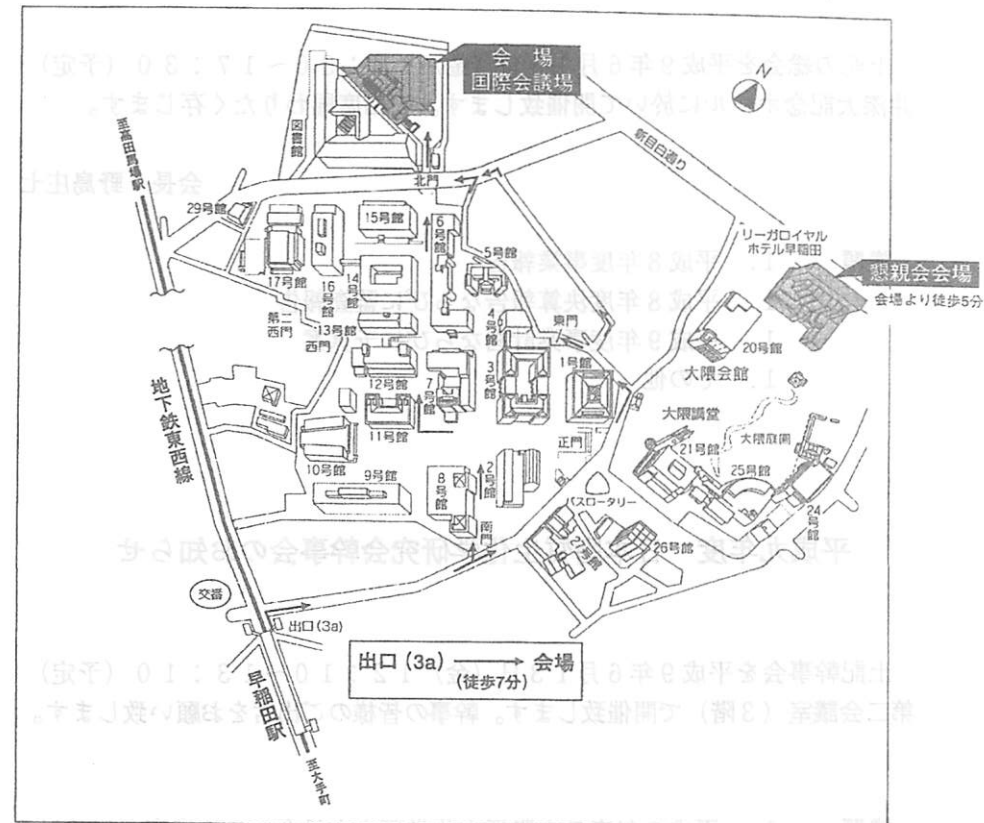
「リポ蛋白レセプターの新展開」

オーガナイザー：山田信博(東大・医)

1. LDLレセプター遺伝子ファミリーの生体内機能
石橋 俊(東大・医)
2. アポリポタンパク質受容体と細胞内コレステロール Efflux
横山信治(名古屋市大・医)
3. スキャベンジャー受容体と動脈硬化
—新しい酸化LDL受容体CD36の意義—
野崎秀一(阪大・医)
4. 血管内皮細胞上新規スキャベンジャー受容体
安達栄樹(理研)
5. 内皮細胞のレクチン様酸化LDL受容体
沢村達也(京大・医)

会場のご案内

会場：早稲田大学国際会議場(東京都新宿区西早稲田1-20-14)



交通のご案内

▲主なアクセス▲

- ① 東京駅 → 2分 → 大手町駅
地下鉄丸ノ内線
大手町駅 → 12分 → 早稲田駅
地下鉄東西線
- ② 飯田橋駅 → 6分 → 早稲田駅
地下鉄東西線
- ③ 新宿駅 → 4分 → 高田馬場駅
JR山手線
高田馬場駅 → 3分 → 早稲田駅
地下鉄東西線

平成九年度 日本脂質生化学研究会総会のお知らせ

上記の総会を平成9年6月13日(金) 16:30~17:30(予定)
井深大記念ホールに於いて開催致します。ご出席賜わりたく存じます。

会長 野島庄七

- 議題
1. 平成8年度事業報告
 1. 平成8年度決算報告ならびに監査報告
 1. 平成9年度事業計画ならびに予算案
 1. その他

平成九年度 日本脂質生化学研究会幹事会のお知らせ

上記幹事会を平成9年6月13日(金) 12:10~13:10(予定)
第二会議室(3階)で開催致します。幹事の皆様のご出席をお願い致します。

- 議題
1. 平成9年度日本脂質生化学研究会総会への提案事項の検討
 1. その他

会長 野島庄七

○幹事の皆様には別途、御案内を申し上げます。

○尚、昼食代 1,000 円を当日申し受けます。

第39回研究集会発表演題の募集

手続きが例年と変わっておりますのでご注意下さい。

① 演題の申し込みについて

すべて口頭発表で、A講演：発表15分・討論5分、B講演：発表12分・討論3分を予定して居ります。

演題申し込みは挿み込みの用紙あるいはそのコピーを用い、講演要旨集用原稿とともに3月末日までにお送り下さい。

要旨集用原稿はA、B講演共に2枚~4枚とし、A4の白紙に別掲の要領で作成して下さい。なお演題採択は原稿審査により決定しますので御了承下さい。

② 演題の申し込みと講演要旨集用原稿送付先

199-01 神奈川県津久井郡相模湖町寸沢嵐
帝京大学薬学部薬品物理化学教室内
日本脂質生化学研究会事務局 宛

日本脂質生化学研究会講演集用原稿作成要領

1 原稿はA4の白紙に縦260mm X 横170mmの枠中におさめて印刷して下さい。原則として字の大きさは12P、字数は37字/行、38行/頁として下さい。予稿集印刷の際、4/5程度に縮尺され、そのまま印刷されますので御留意下さい。図表は写真や、コピーを糊付けしても結構です。

2 第一枚目の原稿用紙には演題名、所属、氏名、要旨を下記例を参考にして次の要領で書いてください。

演題名：8文字目から書き始め、2行以内におさめる。

所属・氏名：演題名より1行空ける。8文字目から氏名を書き所属は()内に入れる。

要旨：所属・氏名より1行空ける。1文字空けて書き始める。全体を枠で囲む。

本文：要旨より2行空ける。

3 原稿送付

原稿用紙の裏側に鉛筆で印刷順を記し、コピー2部と共に厚紙等で原稿を保護して送ってください。(講演申し込み用紙も同封してください。)

(例)

抗酸化LDL.....

山田太郎、山本ゆか、高柳恒(東大・薬)

田中登(都臨床研)

ヒト動脈硬化病中の.....

生体内で.....

希望講演区分

()

A. 脂質

B. 脂質

A: 単純脂質、脂肪酸 B: ステロイド、胆汁酸 C: リン脂質 D: 糖脂質
E: リポタンパク質 F: 酵素、代謝 G: 生体膜 H: 病態、栄養 I: その他上記の区分に属さないもの

希望講演区分 () 内線 ()

連絡先(〒)

申し込み者氏名

発表者氏名

演題

受付番号

講演番号

区分

第38回日本脂質生化学研究会研究集会報告

実行委員長・野澤義則

第38回日本脂質生化学研究会の研究集会は、1996年6月20日(木)と21日(金)の二日間、岐阜市の岐阜未来会館で開催されました。参加者は281名あり、一般講演の72演題が3つの会場に分かれて発表され、活発な討論が行われました。第一日目の秦 葦哉(慶応大・医)、野間昭夫(岐阜大・医)両先生のお世話によるシンポジウムでは、「リポ蛋白—最近の進歩」と題して、小園康範(慶応大・医)、堀内正公(熊本大・医)、清島 満(岐阜大・医)、一瀬白帝(山形大・医)の各先生方にリポ蛋白質研究についての最新の現状をお話していただきました。シンポジウムに続いてGuy A. Thompson先生(University of Texas)の特別講演

「Structure, Metabolism, and Function of Glycosylphosphatidylinositol-anchored Protein」が山川民夫先生の座長で行われ、GPIの興味深いお話を伺いました。演者の先生方にはご多忙中のところ、ご講演を快諾していただき、厚く御礼申し上げます。また、夕方には会場を岐阜会館に移して懇親会を行いましたところ多数の会員の皆様に参加していただき盛会でした。

今回は、地方でもあり会場までの交通の便が悪いために、例年より参加者が少ないようでした。会員の皆様には研究集会の参加費および懇親会の前納をお願いし、約100名の方々に前納していただきました。お手数をおかけしましたがおかげさまで名札の準備など事務的な面で助かりご協力に感謝致します。ただし、一日目の昼食の弁当の予約数が大幅にはずれたのが唯一の誤算でした。本来講演会場として設営されていない会場もあり、自分たちだけで設営したので不行き届きの事も数々あり申し訳ありませんでした。最後になりましたが、研究会の運営に協力していただいた会員の皆様に、無事会を終えることができましたことを感謝致します。特に、前研究集会実行委員長の飯田静夫先生には最初から運営についてのご指導をいただきました。

高橋善彌太先生を偲んで



岐阜大学第一内科
武藤泰敏

高橋善彌太先生は、1996年4月14日午後3時25分、呼吸不全のため77歳の生涯を閉じられた。葬儀は先生の御遺志により密葬で取り行われるとの訃報に接したのはロンドン滞在中で、St. James Court Hotelにおいてであった。なお、生前の御功績に対して、勲三等瑞宝章が下賜された。

先日、岐阜で日本脂質生化学研究会（実行委員長 野沢義則教授）が開催されたさい、野島庄七会長より、高橋善彌太先生の追悼文をしたためるようにとの御下命があった。脂質生化学研究会の方はこのところ大変ご無沙汰しているような、不肖の弟子であるので、ご満足いける追悼文になるか大変心配である。野島先生の許に、高橋先生の言いつけで、ホスホリパーゼ A₁ の標品を頂きにゆき、それが見事なもので、大変よい結果がえられたことを昨日のように想い出している。どうしても、脂質との関係では、東京大学第三内科、第9研究室時代の昔に戻ることであり、その頃のエピソードを中心にご披露して、先生を偲ぶ一端としたい。

先生は東京府立一中、一高を経て、東京帝国大学医学部医学科を昭和19年に卒業、直ちに大学院特別研究生として生化学教室に入られた。昭和21年特別研究生修了のあと2年間、米国進駐軍第42総合病院生化学検査室に勤務された経験が、外国留学や臨床検査に対して、深い関心をお持ちであったことと関係があるのかもしれない。昭和23年東大生化学教室に戻られたが、同年冲中内科（東大第3内科）の門をたたかれた

のである。小生はその間の事情を伺ったこともなく、詳細は明らかではないが、「ヒトの病気と全く同じモデルを動物では再現できないからね」と洩らされたことを憶えている。単純な系ではなく、より複雑な複合系に立ち向かって、その鍵をとくことに、より興味があったのではないかと推察している。

昭和29年から米国オレゴン大学、ついでボスの Lerner 教授とともに移られ、昭和30年から32年まで Yale 大学に留学された。当時は貨物船に便乗して渡米していた時代で、留学直前に、ご尊父が食道癌で冲中内科に入院されたが、そのさいご尊父が留学を辞退すべきでないと決然と言われたそうで、父親の声を後に、悲壮な決意で旅立たれたと聞いている。メラトニンの発見の端緒となる輝かしい仕事をなされたが、先生のお話によると「皮膚を黒くするホルモンがあるなら、白くするものもあるはずだ」という直観（いまだいう右脳の働き）であったと聞く。オレゴン大学から Yale 大学にかけては、夜は図書館でデカルト以来の文献を漁り、朝はカエルの皮膚に、シカゴの屠殺場から送られてくるウシ松果体のエキスを振りかけて、色調の変化を観察し、メラニン顆粒を凝集させる因子（最小有効濃度 5×10^{-11} g/ml）をつきとめたとのことである（最新医学1958）。過日、Lerner博士から心を込めた高橋善彌太先生の追悼文が、森 亘先生を通じて送られてきた。当初は、New York Timesに掲載予定のため書かれたが、期日が過ぎてしまったとのことで、東大第3内科の「同窓会だより」（27号、1996.12.1）に収載されている。どうした訳か「メラトニンのテーマは日本ではやらない」とよくいわれていた。先日も米国に出張する機会があり、メラトニン（カプセル）が、睡眠調整薬として OTCで販売されており、そのたびに先生が没頭された実験の日々が想い出されてくる。実にオリジナリティのある研究ではないかと思ひ、尊敬の念を禁じえない。

先生の東大での内弟子としては、田中 圭先生（昭39卒）が筆頭で、小生（昭33卒）、深沢俊男先生（昭34卒）、板倉弘重先生（昭36卒）の4人で、その他研究室には金井正光先生（昭26卒）、故広瀬麟也先生（昭30卒）らも実験をなさっていた。冲中先生の研究室回診が年に2、3回巡ってきたが、実験室では高橋先生の指導に全幅の信頼をおかれており、ただ印象に残ったのは、「タイプライターに向うと英語論文は書き

出せるものだよ」というアドバイスである。

先生との本格的な出会いは、ベッドの指導医として、そして9研で直接研究を指導して頂くことになってからである。2人目の内弟子ということで、ご想像の通り、大いにしごかれたわけである。殆ど1日の大部分はご一緒するわけである。小生自身は、先生が養米直前にまとめられた「サルバルサン黄直」が、薬剤性肝障害（いまでいう肝内胆汁うっ滞）であり、従来いわれた中毒性肝炎ではないという画期的な論文に魅了されていた。この鋭い臨床観察は、先生が基礎から臨床に移られてきた理由の1つであり、大変満足されたのではないかと想像している。

先生は当時、米国流の研究ならびに研究室を創設することに全力を注がれており、その代表的なテーマが「ガスクロマトグラフィーの医学的応用」であった。小生の研究テーマは「低級脂酸と肝性昏睡」であり、微量の低級脂酸（ $IC_4 \sim C_6$ ）を検出するためには、高感度アルゴン・ガスクロが必要で、当時、工学部に1台あった同種の機器の設計図をみせて貰い、それに沿って、町工場からいろいろの部品を購入ないし作製してもらい、また線源（ストロンチウム）を英国の Amersham 社から輸入して、ガスクロを自製することから始まった。しかし、昭和30年当時の部品は板ヒーター1つとってみても、すぐに焼け切れ、しかも、湿気のない、晴天の日しか計器が安定しないといった、いまでは考えられない苦渋の日々であった。殆ど1年間は機器作製に追われ、ガスバーナーで熱すれば、どこにでもハンダ付けができる腕前になっていたと記憶している。なんとかサンプルを入れられるようになったある日、バラック建ての“手づくり”のガスクロをご覧になった山川民夫教授（当時東大医科研）が、ビックリされたのを、昨日のように憶い出す。また、夜遅い実験で、「しまった」と思う失敗をすると、いつでもすぐ後で見守っておられた先生を忘れることができない。後姿で、失敗敗かどうかすぐに解ったと洩らされていた。したがって、臨床応用といっても、先生の場合は一味も、二味も違っており、徹底的に基礎からたたき上げるというものであったといってよい。低級脂酸が便（とくに離乳後）に多く、昏睡作用（逆説睡眠を誘発）があり、肝性昏睡患者で血中に増加することが判明して、日本消化機病学会の特別講演の1部に発表して頂いた。この研究は、田中 圭先生の先天性イソ吉

草酸血症の発見の契機となり、また最近注目されている肝性昏睡時の低分岐鎖アミノ酸血症の惹起因子の1つとして、さらに、癌細胞のアポトーシスを誘発するものとしても、なお話題を提供している。高橋善彌太先生の卓見という他はない。どうも便と低級脂酸との関係は、恩師児玉教授と一緒に研究された、腸内ガスの研究にヒントを与えているように思われてならない。

学位論文を終え、大阪大学の蛋白研に文部省流動研究員として内地留学をしたいと申し出たところ、周囲の反対にも拘らず、先生は即座に許可してくれた。大変有難いことだと思っている。ついで、米国留学中 New York へ国際電話が入り、「岐阜大学の内科教授に決ったよ」とのご連絡を頂いた。岐阜大学には昭和46年から57年卒まで、ついで県立岐阜病院院長、さらに虎の門病院の顧問としてご活躍されたのはあまりにも有名である。日本内科学総会の宿題報告は「急性肝不全の臨床」であり、劇症肝炎の全国集計と予後予測などの研究に傾倒され、とくに推計学に専念された。

米国に国際電話があった後、「宮本武蔵は所詮ルンペンである」とのお手紙を頂いたのを今でも鮮烈な印象として焼き付いている。早く1人前になれというご叱正かと思っている。先生は大変厳しい方であったが、「われわれが病気をしたときは、想像もできない位やさしい方だ」と、いつも田中 圭先生となぐさめ合っていた日々が、いまでもなつかしい思い出とさえなっている。

改めて、先生の御冥福を心からお祈り致します。

(1997. 1. 3)

“Frontiers in Bioactive Lipids '96”に出席して
大阪市立大学医学部細菌学教室 矢野郁也

1996年5月6日から9日迄の4日間、第16回 Washington International Spring Symposiumの一つとして“Frontiers in Bioactive Lipids '96”という国際シンポジウムが開かれた。この会は、Dr. Jack Y. Vanderhoek, (Dept. of Biochemistry and Molecular Biology, The George Washington University, Medical Center, Washington, DC)が主催して、最近の脂質生化学のトピックスの一つである“Bioactive Lipid”の最前線の問題を取り上げて情報交換を行うために開催されたもので、セッションの主なものは、生理活性脂質即ち Fatty acids and esters, Eicosanoids, Phospholipids, Sphingolipids, Lipid binding proteins, Lipid receptors and antagonists 等、各々の分野の最先端で活躍している人たちが各セッションをアレンジして開催された。当初登録された参加者数は160名前後であったが、実際には200名近くの参加があり、日本からは武富保先生(信州大学)、和久敬蔵先生とその教室の方々(帝京大学)、私達の教室から藤原、渡辺、矢野の3名及びクラブコスメテックス研究所の中山、池田各氏らが参加、コンパクトではあるが中身の濃い学会であった。

日本でも我が日本脂質生化学研究会は歴史を重ね、今や38回を数えるに至っている。元々脂質の生化学は流動性を保つための細胞膜成分としてその化学構造の解明に長年の年月を要し、蛋白質とことなり生理活性や分子生物学的研究は遅れた感があったがEicosanoidに始まる脂質の生理活性の研究は、今や細胞の分化や増殖、アポトーシスなどに関わる signalとして、また各種抗原や生体調節物質として主要な役割を演じていることが明らかにされ、特にSphingolipidやglycolipidの分野での発展はめざましい。筆者らの発表に指定されたSphingolipidsの sessionでは Sarah Spiegelの流暢な司会に始まる活発な発表と討論が続きアツと思う間に sessionが終わり、参加者のこの分野への意気込みの強さが感じられた。Water gateにも近いGWUのキャンパスがボトマック川畔の緑にとけ込んで美しかった。

第7回国際リン脂質会議に出席して

井上圭三 (東大薬学部)

1996年9月8日から10日にかけてベルギーのブリュッセルで開催された第7回 International Congress on Phospholipidsに招待され出席した。こんな国際会議があるとは小生不勉強でこれまで知らなかったが、AOCS (American Oil Chemist Society) Phospholipid Division がスポンサーで行われているシンポジウムのようなのである。今回は Steven H. Zeisel 教授 (University of North Carolina, Department of Nutrition) と Bernard F. Szuhaj 博士 (Central Soya Company) がオーガナイザーをつとめた。当初、ギリシャのロードス島で開催される予定であったが、なぜか急にベルギーに変更になった。会場のマイクやスライドプロジェクターの設定なども最初の演者が演台に立ってからあわてて始めるというおおらかさは日本では想像もつかないものであった。全体で約150名程度の出席。日本からは、アントワープで開かれた ICLB の後参加された野島庄七先生をはじめ、矢野郁也先生(大阪市大)、新井洋由氏(東大薬)、私の4名。ICBL から流れてくる参加者が多いと予想していたが、意外にも両者の関係は全くないようで不思議な気がした。ICBL はなんといっても純粋にヨーロッパの学会であり、かたやヨーロッパでやる America の学会ということなのであるだろうか？私がこれまでに参加してきたアメリカ国内の小規模の会議 (Gordon Conference on Lipid Metabolism, FASEB Seminar on Phospholipases, Keystone Symposium on Lipid Metabolism and Signal Transduction など) と比較すると本会は仲良しクラブのサロンの雰囲気をもっと漂わす会議であまり緊張感を感じ

じない。栄養学者、油脂会社関係者が多い会で、脂質の栄養、特に食用油にいかなる付加価値がつけられるかが最大の関心事であるように思えた。3つのセッションからなり、第1は Phospholipids: Growth, Death, and Cancer、第2は Choline, Choline Phospholipids, and the Brain、第3は Importance of Phospholipids in Health and Disease である。スフィンゴ脂質の阻害物質フモニシンの発見で世に知られる Alfred Merrill がスフィンゴ脂質代謝、シグナル伝達、アポトシスの関連を説き、Mordechai Liscovitch は例によって PLD の活性発現調節とその意義を論じた。抗腫瘍性のあるアルキル型リン脂質のガン細胞選択性という一時代前の研究を今なおしつこく追求している人もいてその信念だけには敬服した。Dennis Vance はホスファチジルエタノールアミン N-メチルトランスフェラーゼには2種類のイソフォームがあり、1は小胞体膜に、2はミトコンドリア膜に存在すること、PEMT1 は発ガン性化学物質で処理した動物の肝臓中のガン化した部分で著しく低くなっていること、PEMT1 の cDNA をラット肝臓ガン細胞に発現するとその細胞の分裂速度が2倍以上遅くなることなどを見出した。この酵素が肝臓実質細胞におけるガン suppressor として機能している可能性を指摘した。Jan Blusztajn はコリン投与が動物の記憶力が増強すること、その原因は脳中のアセチルコリン増加、膜脂質のひとつであるホスファチジルコリンの増加、シグナル伝達に参与する PAF の増加によると推定した。主催者の一人である Steven Zeisel は新生児、胎児期におけるコリンの栄養素としての重要性を強調した。乳腺におけるコリンの能動輸送が著しく高い事実、母乳中のコリン濃度が出生後急激に上昇し、その後低下する事実、さらに母体の血中濃度に比較して羊水中のコリン濃度が高く、妊娠ラットが高コリン食を好む事実などこのような

考え方を支持する知見が多い。摂取されたコリンはアセチルコリンやコリンリン脂質の原料となっていると思われるが、なぜ特定の時期に、コリンがこれほど重要かはいまだなぞである。Nicolas Bazan は持論である脳機能における PAF の重要性を、また Richard Gross は心筋虚血時の Ca 非要求性ホスホリパーゼ A2 活性化の重要性を主張した。Sharon Suchy は遺伝病である Lowe 症候群において、ホスファチジルイノシトール 4,5 ビスリン酸 5 ホスファターゼの一つのアイソフォーム(ゴルジ膜に存在)が原因遺伝子産物であることを示した。最近、PI4, 5P₂ がゴルジ膜トラフィッキング、ARF-GAP、ホスホオリパーゼ D の機能調節に関わっていることが明らかにされていることなどから、この酵素アイソフォームの欠損はタンパク質トラフィッキングの制御異常を来すのではとも考えられる。新井助教授は脳における PAF-AH (アセチルヒドロラーゼ)アイソフォーム 1b が3量体酵素であり、サブユニットの一つが Miller-Dieker 症候群の原因遺伝子産物であること、このアイソフォームが脳形態形成時に著しい変動を示すこと、これらのことから本酵素の脳形態形成における重要性が考えられることなどを講演した。

冒頭でも触れたように会の運営はいろいろと不備が多く順調とはとても言えない状況ではあったし、全体として脂質の栄養素としての重要性を追求するのがねらいであった割には n=3 脂肪酸を含むリン脂質分子種などはテーマとしてまったく取り上げられず掘り下げ不足も感じた。しかしながら、会場として使われたホテルは豪華ではないものの、会場にしても食堂、部屋などもゆったりしていたし、立地条件もよく、中世の雰囲気をも十分に漂わせる市の中心広場にも遠くなく、ブルッセル市内は夜でも安心して歩けるのでアフター会議を楽しむには事欠かない。その上、2日目の午後には参加者全

員でブルージュまでバス旅行の excursion がありベルギーで最も美しいといわれる中世の小都市の散策を楽しめた。偶然アントワープでの ICBL の後自転車旅行中の背山教授に出会った

たりして世界はせまいと痛感したりした。

気楽に企画してこのぐらいの国際会議ができることから、日本での状況を考えてみると遠隔地であるというハンデ以上に、安価に、立地条件の良い適当な会場、宿泊施設の確保が困難であることが最も障害となっているように思える。最近あちこちに国際会議場と称する施設ができつつある。しかし使用料は到底、われわれが“気楽に”企画できるようなものではない。あまり資金の確保など準備に精力を使い果たすことなく国際会議を企画するなんて日本では夢でしかないのだろうか？



第37回 国際脂質生化学会議 (ICBL) 報告



東京大学医学部 脊山洋右

第38回国際脂質生化学会議は1996年9月4日から7日にかけてベルギーのアントワープで開催された。

アントワープはその昔、通りかかる船から重税を課していた巨人Antigoonをローマ軍の兵士Braboが倒してその“前腕(ante)”を“投げた(werpen)”という伝説に基づいて命名されたと言われている。市庁舎前の広場にはその銅像が置かれて市の象徴となっている(図1)。現在では世界のダイヤモンド取引の中心地として有名である。学会が行われたアントワープ大学は市の南に位置している。



図1 Braboの像

主催者はICBLの会長でもある同大学のAlbert Lagrou教授とゲント大学のMaryvonne Rosseneu教授であった。参加者は160名前後で、この会としては標準的な規模であった。これは国際会議とはいえ毎年開催されることと、トピックスが3つに絞られて毎年変わるという性格から、参加者層に限られる結果である。1988年に東京で開催した本会に500名が参加したことは異例で、昨年アメリカで行われた会は70名ほどの参加に止まっている。

日本から出かけた者は15名におよび、10%を占めたことは日本における脂質生化学研究者層の厚さを端的に示している。

今回取り上げられたテーマは、1.リポタンパク質代謝に関与する酵素と輸送タンパク質、2.タンパク質の脂肪酸付加反応、3.ペルオキシソームにおける脂質代謝、の3項目であったが、ポスターセッ

ジョンとしては幅広く90題の発表が行われた。昨年の会からこのポスター発表に対して賞が与えられるようになり、8名の審査員による選考の結果、1位にはドイツのGisela Schindlerが、2位には入谷信子氏が選ばれ、9月6日の夕食会において表彰が行われた。

9月4日はVan Deenen LectureとしてフィラデルフィアのM. Phillipsにより「血清脂質研究における物理化学的アプローチ」という講演で始まり、引き続いて歓迎レセプションが行われたが、筆者はブリュッセルからのバス連絡が悪く懇談の半ばからの参加となった。ベルギーはビールの国で300種類を越す「地ビール」があって、個性あふれるビールで盛り上がっていた。

大会2日目の9月5日は8時45分から夕方5時半まで第1のテーマについて9題の講演と33題のポスター発表が行われた。酵素の構造と機能という関わりから物理化学的な発表が多く、前夜の特別講演とともに主催者の関心を表したものという印象を受けた。夜には市の中心にあるt El zenvel dのチャペルで合唱コンサートが催された(図2)。

9月6日は5題の講演および22題のポスター発表は午前中だけで、タンパク質のイソプレニル化とかGPIアンカータンパク質の講演が行われた。池沢宏郎氏はGPIアンカータンパク質が真核生物だけではなく古細菌にも存在することを報告した。昼食時にはSteering Committeeが開かれ、今後の開催予定等が決定された(図3)。午後は本会恒例のバスツアーでブリュッセルとの中間に位置する中世の街、メケレンを訪れ、市庁舎を見学した後にビール工場で味比べを楽しんだ。夜は近郊の街の歴史的なレストランでカンファレンス



図2 脊山、Gali、野島

ディナーとなり、深夜遅くまでダンスに興ずるなど西欧人のタフさに感心した次第である。ホテルに戻ったのは午前1時をまわっていた。

9月7日は前夜のパーティの疲れもものともせず、8時45分から5時半までペルオキシソームにおける脂質代謝をテーマに8題の講演と29題のポスター発表が行われた。林秀徳氏は肝のペルオキシソームで行われるプラスマローゲンの生合成における脂肪アルコールの起源について講演を行った。

この4日間を中心にベルギーは抜けるような青空のもとに、まれにみる好天に恵まれた。ハンザ同盟以来の商業都市で行われた印象深いCBLであった。第38回は別ページに記すようにイタリアのAssisiで開催されるが、日本から多数の参加があることが期待されている。



図3 Steering Committeeのメンバー

左から、1:Goracci, 2:Paltauf, 3:Spener, 4:Lagrou, 5:Ott, 6:Rosseneu, 7:Galli, 8:Gar ton, 9:Wahle, 10:Lagar de, 11:Poisson, 12:Seyama

第38回 国際脂質生化学会議 (ICBL)

38th International Conference on the
Biochemistry of Lipids

〔生理活性脂質データベース〕作製へのご参加のお願い

国立国際医療センター研究所代謝疾患研究部
大島美恵子

【会期】 1997年9月16～19日

【会場】 "La Cittadella" in Assisi、イタリア

【シンポジウム】 1. Enzymes involved in phospholipid synthesis
2. Skin lipids: from biochemistry to pathophysiology
3. Lipid metabolism in diabetes

【一般演題】 上記テーマを含め、脂質生化学全般

【演題申込締切】 1997年6月1日

【主催者】 Prof. Luciano Binaglia & Prof. Gianfrancesco Goracci
Institute of Biochemistry, University of Perugia
Via del Giochetto, 3
06122 Perugia, Italy
E-mail. icbl@unipg.it Fax. 39-75-585-3428
URL: <http://www.med.unipg.it/icbl>

【連絡先】 〒113 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学医学部栄養学教室 脊山洋右
Tel. 03-3812-2111 (内3495) Fax. 03-5689-2704
E-mail. yousuke@m.u-tokyo.ac.jp
URL. <http://eiyo.m.u-tokyo.ac.jp>

【セカンドサーキュラー】 2月に配布予定、主催者あるいは上記連絡先に
問い合わせして下さい。

本プロジェクトの経過について

脂質データベースは、脂質生化学研究会を母体として近畿大学の林陽教授を中心に重井医化学研究所渡辺清博氏のデータ入力に支えられて過去約10年間継続してデータを集積して参りました。このプロジェクトには、永井克孝先生を初め脂質生化学研究会の方々のご協力があり、文部省科学研究費の助成に支えられて今日まで進んでまいりました。

しかし、来年3月の林陽教授の御定年に伴い、本プロジェクトが途中の段階で挫折するおそれがでてまいりました。

そこで、科学技術振興事業団（旧名称 日本科学技術情報センター）が公募したデータベース化支援課題に、平成8年度から10年度の3年間の計画をたて、今回は〔生理活性脂質データベース〕という名のもとに国立国際医療センターが応募致しました。そしてこの度、幸いに採択の知らせを受けました。これは、国立研究所に眠っているデータを、データベース化して世界に発信する作業を、日本科学技術情報センターが支援しようという事業で、国立研究所が主体となって応募する以外には採択される方法がありませんでした。そこで、大変僥越とは思いましたが、国立国際医療センターから、応募させていただきました。しかし、ここに至るまでには、日本科学技術情報センターへの林陽教授の精力的な働きかけがあった事を申し添えておきます。

最初は文部省の科学研究費データベース助成程度の予算を考えておりましたが、インターネット時代の始まりという時期にうまく合致したためか、日本科学技術情報センター側が大変乗り気になってくれまして、データベース作製予算としては、選定された4課題中の最高額、年間で3000～4000万円、3年間で約1億円ほどの支援が受けられる事になりました。しかも、平成8年度からの予算がつきましたので、平成8年の期末である平成9年3月末までに早急に事業を立ち上げて第一歩を踏み出さねばなりません。

そこで、野島庄七会頭にこの事をお話しし、改めて脂質生化学

学研究会としての事業へのご支援をお願いいたしました。そして、野島庄七会頭より脂質生化学研究会が支援して下さるとのお言葉をいただき、同時に脂質生化学研究会幹事の皆様には、ご協力をお願いの手紙を出させていただきました。そして、平成9年1月8日に第1回データベース構築検討会を開き、各脂質分野のデータの集積責任者を決めさせて頂きました。この事業は脂質生化学研究会の皆様のお力なしでは完成することは出来ませんので、どうぞご協力をよろしくお願い申し上げます。

このプロジェクトは、少なくともこれから3年間は日本科学技術情報センターと国立国際医療センターとの共同研究として進めさせて頂きます。日本科学技術情報センターがデータベース化のためのデータの集積費用やデータベース作製のエンジニア派遣などの技術支援をしてくれる予定です。データを提出して下さる方々には、日本科学技術情報センターから直接謝礼が出る予定になっております。この事業進行のために、事務局を、国立国際医療センター研究所に置かせていただく予定であります。一方、今まで10年にわたってデータ入力をして下さっていた渡辺清博氏には引き続き重井医化学研究所においてデータ入力をお願いし、国立国際医療センター研究所とはオンラインで連絡しながら事業を進めて参りたいと思っています。

これから進めていく事業について簡単にまとめます。

1) 各項目のデータ集積の責任者(交渉中の方もあります)

1. 脂肪酸: 奥山治美, 小林哲幸
2. 長鎖アルデヒド: 和久敬蔵
3. 長鎖アルコール: 里内 清
4. 長鎖塩基: 林陽
5. 胆汁酸: 宇根 瑞穂
6. GLYCERIDE(中性脂質): 植田伸夫,
7. リン脂質: 西島 正弘, 奥山治美, 和久敬蔵
8. 糖脂質: 石塚稲夫(glyceroglycolipid),
鈴木康夫(sphingoglycolipid)
9. LIPOPROTEIN: (交渉中)
10. リポアミノ酸: 矢野郁也,
11. LIPOPOLYSACCHARIDE (交渉中)
12. ステロイド: 石橋 輝雄
13. プロスタノイド: 山本 尚三

14. エーテル型脂質: 古賀 洋介
15. ミコール酸: 矢野郁也
16. ワックス: 川口昭彦, 背山洋右
17. FLAVANOID: (交渉中)
18. 脂溶性ビタミン(交渉中)
19. イソプレノイド: (交渉中)

- 2) いままで集積したデータがすでに約3000件ありますが、これが適当かどうかについてデータ集積の責任者を中心に、早急に検討していただき、不足があれば新たなデータを集積する(さらに3年間で3000件を予定)。
- 3) 一方、インターネットを通じて世界に発信できるような、データベースを再構築する。例えば、IRスペクトルやMSのスペクトルなどもそのまま見えるようなデータベース、立体化学構造が読めるようなデータベース等を考えていますが、これについても皆様のご意見をうかがいたくおもいます。データベース再構築の作業には、JICSTが国立国際医療センターに専門技術者を派遣してくれる事になっています。
- 4) 脂質は様々な化合物の総称でありますため、3年間ですべての項目のデータベースを完成する事は無理と思いますが、3年間のうちに、例えば[脂肪酸], [リン脂質], [糖脂質]といった、割合まとまりやすいデータベースを公開するところまで持ってゆきたいと思っています。

データベースそのものは当分の間、国立国際医療センターに置きますが、公開の際には、日本生化学会や、学会センターなどのホームページとリンクして、世界中のどこからでもアクセスできる誰もが使いやすいデータベースにする事を心がけたいと考えております。また、出来上がったデータベースは、現状維持だけでなく、追加修正していく必要があるかと思いますが、これについても、皆様のご意見を伺いつつ考えていきたいと思っています。なお、本年度の脂質生化学研究会の会期中に皆様のご意見を伺う機会をつくりたいと思っていますので、ぜひご参加ください。会員諸兄姉の暖かいご支援をお願い申し上げます。もし、この件についてのご意見や、アイデアをお持ちでしたら、いつでも下記までご連絡いただけると有り難く思います。

電話: 03-3202-7181 (内線 2810),

FAX: 03-3202-7364, e-mail: oshima@imcj.go.jp

国立国際医療センター研究所 代謝疾患研究部

会の活動状況

1 第38回日本脂質生化学研究会・研究集会の開催

実行委員長：野澤義則教授（岐阜大学・医学部）

日時：平成8年6月20日（木）、21日（金）

場所：岐阜市・未来会館

演題数：特別講演1題、シンポジウム4題、一般演題72題

参加数：278名

文字通り未来を先取りするような設備の整った快適な会場において、研究集会では活発な研究発表が行われ、盛会のうちに終了致しました。野澤義則実行委員長を始め、関連教室のスタッフの方々には、心のこもった準備をしていただきました。ここに改めて厚くお礼申し上げます。研究集会活動につきましては、別掲の実行委員長の報告をご参照ください。

2 第38回日本脂質生化学研究会総会

平成8年6月20日（木）午後5時より、岐阜市・未来会館の第一会場において講演終了後開催された。会議に先立ち、平成8年4月に死去された高橋善弥太名誉会員のご冥福を祈り、全員で黙祷を捧げた。

総会次第

野島庄七会長の挨拶の後、第38回研究集会実行委員長野澤義則教授の挨拶に引き続き、以下の議事が進行された。

議事

(1) 平成7年度事業報告及び決算報告

平成7年度の事業及び決算が配付資料に沿って報告された。研究会事務局の業務は通常どおり円滑に進んでいるとの報告がなされた。決算については繰越金が少し増加するなど健全財政であるとの報告がなされた。

(2) 平成7年度決算報告につき監査の結果が報告され、承認された。

(3) 平成8年度事業計画案

平成8年度における、第38回日本脂質生化学研究会・研究集会、第38巻脂質生化学研究（要旨集）の発行、1996年度の脂質生化学研究会サーキュラーの発行、第38回総会、第1回および第2回幹事会の事業計画案が説明され、承認された。

(4) 平成8年度予算案

ほぼ例年通りの平成8年度予算案について検討がなされた。研究集会補助70万円を80万円に、また、事務経費については20万円を25万円として、第38回研究集

会から実施するという提案が承認された。

(5) 新幹事・役員選出について下記の事項が承認された。

イ) 新幹事の就任（平成9年1月1日～平成12年12月31日迄）

齊藤恵実（静岡県立大・薬・病態薬）、藤本健四郎（東北大・農・食品）、堀内正公（熊北大・医・第二生化）、三輪匡男（静岡県立大・薬・臨床薬）、保田立二（岡山大・医・分子細胞）、山本徳男（東北大・遺伝子実験施設）、吉岡亨（早稲田大・人間科学）の各会員

ロ) 平成8年12月31日任期終了予定の幹事の再任（平成9年1月1日～平成12年12月31日迄）。

ハ) 平成8年12月31日任期終了予定の役員（会長、庶務幹事、会計幹事、会計監査）の再任（平成9年1月1日～平成10年12月31日迄）。

(6) 平成9年度（第39回）研究集会の準備状況の報告

実行委員長 東京大学・薬学部

井上圭三教授

日時 平成9年6月13日（金）、14日（土）

場所 東京・早稲田大学・国際会議場

実行委員長より日程が早まり、上記のように変更されたとの発表がなされた。また、配布パンフレットにもとづいて会場の状況が紹介された。

(7) 平成10年度（第40回）研究集会の実行委員長の選出

平成10年度研究集会の実行委員長に矢野郁也教授（大阪市立大・医）が選出された。

(8) 日本学術会議17期会員選出について

野島会長より上記選出日程が説明され、学術研究団体としての登録申請書の提出についての報告があった。推薦人の人選については会長に一任された。

(9) 林 陽教授（近畿大・理工）より平成8年度文部省科学研究費補助金・研究成果公開促進費による“脂質情報データベース”の研究が採択された旨の報告があり、会員に対し協力要請がなされた。

3 平成8年度第一回幹事会

平成8年6月20日（木）正午より、岐阜市・未来会館の大会議室において開催された。出席者51名（氏名略）。総会に提案すべき事項を審議した。

議事内容は、総会と同じ。

4 平成8年度第二回幹事会

平成8年11月28日(木)午後6時より、日本薬学会長井記念館で開催された。

出席者 山川民夫(名誉会長)、野島庄七(会長)、赤松 稔(庶務幹事)、
瀬高守夫(会計幹事)、植田伸夫(会計監査) 安藤 進、井上圭三、
大橋昌子、川口昭彦、工藤一郎、児島英也、斉藤政樹、島崎弘幸、清水孝雄、
鈴木明身、脊山洋右、竹縄忠臣、玉井洋一、中川靖一、西島正広、西村顕治、
矢野郁也、和久敬蔵、(以上23名)

議事

(1) 平成8年度事業報告

①会員数 正会員749名(平成8年12月現在、海外会員1名含む)

但し、新入会 24名

退会 24名

名誉会員13名(平成9年度事業計画の項参照)

賛助会員20社(同上)

役員
会長 野島庄七 (任期平成10年12月31日迄)
庶務幹事 赤松 稔 (同上)
会計幹事 瀬高守夫 (同上)
会計監査 植田伸夫 (同上)
幹事 (平成9年度事業計画の項参照)

②事業

イ) 第38回研究集会の開催(実行委員長 野澤義則 教授)

平成8年6月20日(木)、21日(金)

演題数: 特別講演 1題、シンポジウム 4題、一般 72題

参加数: 278名

ロ) 脂質生化学研究 38巻の発行(本文315頁)

ハ) 脂質生化学研究Circular 1996の発行(本文31頁)

ニ) 総会及び幹事会の開催

総会 平成8年6月20日(木) 岐阜市・未来会館・長良川ホール

第1回幹事会 平成8年6月20日(木) 未来会館・大会議室

第2回幹事会 平成8年11月28日(木) 日本薬学会長井記念館
1階会議室

③新役員

第38回日本脂質生化学研究会総会(平成8年6月20日)において総会議事(5)のように新役員が承認された。

(2) 平成8年度決算報告 (決算表参照)

決算表に基づいて説明がなされ、承認された。

(3) 平成9年度事業計画

①会員数 正会員微増の見込み

②役員 会長、庶務幹事、会計幹事、会計監査は上記の通り

③幹事

(任期 平成9年12月31日迄)

猪飼 篤、池沢宏郎、石塚稲夫、石橋輝雄、伊藤精亮、大木和夫、鬼頭 誠、
古賀洋介、竹縄忠臣、田辺 忠、村田紀夫、矢野郁也、山本尚三、

(任期 平成10年12月31日迄)

宇田 裕、内海英雄、工藤一郎、島崎弘幸、鈴木康夫、高桑雄一、
高野達哉、塚谷博昭、二木鋭雄、西島正弘、宮澤陽夫、

(任期 平成11年12月31日迄)

赤沼安夫、秋野豊明、阿部敏明、荒木英爾、有田 斎、安藤 進、猪川嗣郎、
板倉弘重、板坂 修、市原宏介、伊藤俊洋、井上圭三、入谷信子、遠藤 章、
大島美恵子、大橋昌子、岡田伸太郎、岡本光弘、奥田拓道、奥山治美、
小野輝夫、川口昭彦、菊川清見、斉藤政樹、渋谷 勲、清水孝雄、杉田陸海、
鈴木明身、脊山洋右、谷口直之、玉井洋一、中川靖一、中野益男、西村顕治、
野沢義則、野間昭夫、広野治子、水柿道直、和久敬蔵、

(任期 平成12年12月31日迄)

上田隆史、加納英雄、賀佐伸省、北 徹、楠瀬正道、児島英也、斉藤恵実、
菅野道廣、武内 望、武富 保、永井克孝、橋本 隆、秦 葭哉、林 陽、
原島圭二、飯田静夫、平山 修、藤本健四郎、穂下剛彦、堀内正公、
牧田 章、松沢佑次、三成 脩、三輪匡男、村松敏夫、保田立二、山下 哲、
山田晃弘、山本 章、山本徳男、吉岡亨、渡辺清博、
(以上95名)

名誉会員

山川民夫(名誉会長)、今井 陽、数野太郎、金田尚志、日下喬史、
斉藤国彦、坂上利夫、内藤周幸、野島庄七、野田万次郎、藤野安彦、
松本 亮、山添三郎

(以上13名)

④事業

イ) 平成9年度(第39回)研究集会

実行委員長 東京大学・薬学部・衛生化学教室
井上圭三教授

日時 平成9年6月13日(金)、14日(土)
場所 東京・早稲田大学国際会議場

- ロ) 脂質生化学研究 39 巻発行
 演題募集 (サーキュラー発行) 2月 1日
 演題申込および原稿締切 3月 末日
 プログラム編成会議 4月 15日頃
 入稿 4月 下旬
 講演集発送 5月 下旬
- ハ) 脂質生化学研究会サーキュラー (1997年) の発行 2月 1日
- ニ) 会議
 日本脂質生化学研究会総会 平成9年6月13日
 第1回幹事会 平成9年6月13日
 第2回幹事会 平成9年11月

(4) 平成9年度予算 (予算表参照)

予算表に基づいて説明がなされ、承認された。

(5) 平成9年度 (第39回) 研究集会の準備状況の報告 井上圭三実行委員長
 配布資料に基づき、シンポジウム企画を始めとする研究集会の準備状況が報告された。
 研究集会を活性化し、事務手続きを簡便にするために、以下の諸提案がなされ了承された。

イ) 講演を2種類A、Bとする。

ロ) 原稿は一題当たり、2～4枚とし、事務局からの原稿用紙送付は取り止める。

ハ) 演題申込み、原稿締切を同時の3月末とする。

ニ) 座長表を掲載する。

ホ) ファルマシア、生化学、日本薬理学雑誌、化学と生物、生物科学ニュースへ研究集会の広告を掲載する事にした。

(6) 新しい名誉会員の推薦につき、赤松庶務幹事が検討することが了承された。

(7) その他

以下につき報告がなされた。

イ) 第17期日本学会議会員の選出に係る学術研究団体の登録申請の結果 (日本学会議会員推薦管理会)

ロ) 複写権委任契約締結について (学協会著作権協議会)

ハ) 著者抄録の利用承諾のお願い (日本科学技術情報センター)

ニ) 平成9年度科学研究費・研究成果公開促進費の公募 (文部省)

賛助会員

エーザイ株式会社 10口

キッセイ薬品工業株式会社 以下5口

塩野義製薬株式会社

大日本製薬株式会社

株式会社バイオックス研究所

三共株式会社 以下4口

住友製薬株式会社

藤沢薬品工業株式会社

山之内製薬株式会社

株式会社資生堂 以下3口

株式会社東京化学同人

第一製薬株式会社

東京田辺製薬株式会社

雪印乳業株式会社

大塚製薬株式会社 以下2口

花王株式会社

日清食品株式会社

日本商事株式会社

萬有製薬株式会社

株式会社ヤクルト本社

(以上73口)

○平成8年度決算表及び平成9年度予算表

収入の部 項目	平成8年度		平成9年度
	予算	決算	予算
正会員会費	2,250,000	2,085,500	2,247,000
入会金	80,000	48,000	80,000
賛助会員会費	750,000	680,000	730,000
講演集売上	150,000	37,000	150,000
広告収入	850,000	1,027,425	1,000,000
利子	10,000	102,675	10,000
寄付金	0	50,000	0
雑収入	0	0	0
小計	4,090,000	4,030,600	4,217,000
前年度よりの繰越金	3,064,038	3,064,038	3,088,692
計	7,154,038	7,094,638	7,305,692

支出の部 項目	平成8年度		平成9年度
	予算	決算	予算
研究集会補助	700,000	800,000	800,000
会報製作費	130,000	135,000	130,000
講演集製作費	1,350,000	1,320,000	1,350,000
旅費	120,000	26,000	120,000
郵送料・通信費	450,000	457,940	450,000
事務用品費	100,000	172,028	100,000
会合費	200,000	198,510	200,000
謝金	50,000	0	50,000
総会経費	5,000	5,000	5,000
事務経費	200,000	250,000	250,000
事務委託費	650,000	638,986	650,000
雑費	50,000	2,482	50,000
小計	4,005,000	4,005,946	4,155,000
次年度への繰越金	3,149,038	3,088,692	3,150,692
計	7,154,038	7,094,638	7,305,692

研究会事務の取り扱い内容と連絡先

【I】日本脂質生化学研究会事務局で扱う事務

- 1 Circularの原稿依頼・編集等
- 2 研究集会の演題受付
- 3 要旨集の原稿受付・編集等
- 4 総会・幹事会の案内・資料作成等
- 5 その他

連絡先:

〒199-01 神奈川県津久井郡相模湖町寸沢嵐1091
帝京大学薬学部薬品物理化学教室内
日本脂質生化学研究会事務局
Tel (Fax) 0426-85-3280

【II】(財)日本学会事務センターで扱う事務

- 1 Circularおよび要旨集の発送とその未着クレームの受付
- 2 年会費の請求および徴収
- 3 所属・住所・氏名等の変更の受付
- 4 入会・退会の受付

連絡先:

〒133 東京都文京区本駒込5-16-9
(財)日本学会事務センター
会員業務部
Tel 03-5814-5810
Fax 03-5814-5825

編集後記

今回もご多忙中の所、第38回研究集会実行委員長の野澤義則先生ならびに井上圭三、大島美恵子、背山洋右、矢野郁也の各先生方に玉稿をお願い致しました。有り難うございました。

また名誉会員高橋善弥太先生には1996年4月14日に亡くられました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。武藤泰敏先生には高橋先生の追悼文をお願い致しました。

本研究会を山川先生から引き継いでから三期目になりました。特に新しい事業を始めたということはありませんが、会費の値上げなしで収支バランスが調整されています。正会員ならびに賛助会員の方々の絶大なご支援によるものであることは言をまちませんが、更に担当幹事および幹事補佐の目に見えないご努力にもよっています。有り難うございます。

昨年末になって、科学技術振興事業団(旧名称日本科学技術情報センター)のデータベース化支援課題として、国立国際医療センターから応募した「生理活性脂質データベース」が採択になりました。この事業の具体的推進に若干の当研究会幹事の方々が、関与されております。その点を考えて、当研究会がこの事業への精神的支援を致してはどうかと思案しております。第39回の脂質生化学研究会の折、皆様より具体的ご意見をいただけることを期待しております。(SN)